



平成25年度

国語

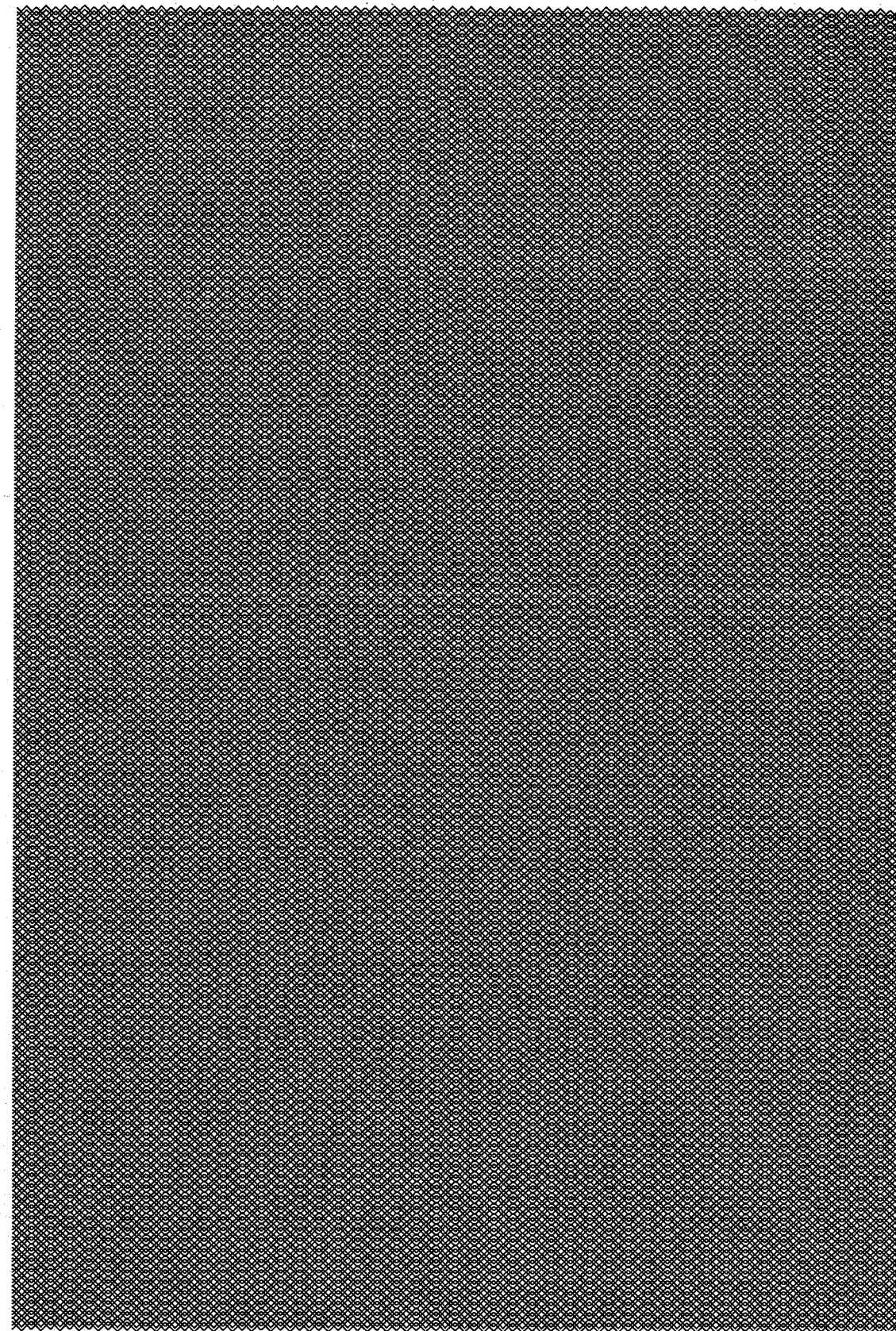
第1回

頒布用

注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があれば、だまって手をあげなさい。
7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあとは余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きなさい。

受験番号					ふりがな	
					氏名	



一

次の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 寝台車に乗って旅をする。
- ② 誇大な広告におどらされてはいけない。
- ③ 故郷への愛惜の思い。
- ④ 論争の口火を切る。
- ⑤ 縁日に露店がたくさん出る。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① シュンライが轟く。
- ② クラスで転校生をショウカイする。
- ③ マボロシのような影。
- ④ スコやかに暮らす。
- ⑤ 東京のコウガイに家を買う。

次の①～⑤にはそれぞれ三つの文が記されています。それぞれの文の意味を表すことわざや慣用句などを考えて、その三つに共通して用いられている漢字一字を答えなさい。

例

- ・慎重過ぎるほど注意をし、絶対にまちがえないようにすること。↓(石橋をたたいて渡る)
- ・努力や援助が少なくて、何の役にも立たないこと。↓(焼け石に水)
- ・がまん強く辛抱すれば必ず成功すること。↓(石の上にも三年)

答え：石

①

- ・幼いころに、ともに遊んだ友。幼ともだち。幼なじみ。
- ・気性のさっぱりしているさま。こだわりのない性格。
- ・勢いが激しくてとどめがたいこと。押さえきれないほどの盛んな勢い。

②

- ・小さな努力でも根気よく続けてやれば、最後には成功すること。
- ・もめごとなど悪いことが起こったあとは、かえって基盤がしっかりしてよい状態になること。
- ・物事が相次いで現れること。似たようなものが続々と出現すること。

③

- ・世間の経験を多く積み、物事の裏表を知り抜いていて悪賢いこと。また、そのような人。したたか者。
- ・あせらずにじっくりと待っているれば、やがてよい機会がめぐってくること。
- ・自分の狭い知識や考えにとらわれて、他の広い世界のあることを知らないで得々としているさま。

④

- ・どんなに慈悲深い人でも、無法なことをたびたびされると怒ること。
- ・物事をほとんど仕上げながら、肝心な最後の仕上げが抜け落ちていること。
- ・知れば腹も立つが、知らないから平静でいられるさま。また、本人だけが知らないで平然としているのを、あざけっていることば。

⑤

- ・意外なことが原因となって、めぐりめぐって好結果がもたらされること。また、あてにならない期待をすること。
- ・穏やかにあしらってたくみに受け流すこと。
- ・危険が迫っていて今にも滅びそうなこと。

四

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

(内山節『文明の災禍』による)
著作権の都合上で本文を割愛しました。

問一 ☐ A ☐ D に入る言葉として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一回しか使えません。)

- ア むしろ
- イ ところが
- ウ または
- エ だから
- オ もちろん

問二 ☐ にあてはまる言葉を本文中の言葉二字で答えなさい。

問三 本文には、次の段落が抜けている。この段落がもともあつた場所を探し、その直前の五字を抜き出しなさい(句読点も一字と数える)。

東京タワーもそのひとつだったような気がする。それは戦後の復興の象徴であり、日本がテレビの時代へと変わっていくなかで建設された。

問四 ―線部①「安全性を保証する技術力に守られた原子力発電」とあるが、なぜ「」が付いているのか。理由として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 原発の安全性や技術力は絶対的なものではないということが今はわかったから。
- イ 三月十一日以降にこのキャッチフレーズは無効なものとなってしまったから。
- ウ 原発を積極的に推進する人々が作り上げた神話にすぎなかったから。
- エ 現実には原発は安全性を保証するだけの技術力に守られていなかったから。
- オ 建設当初から原発の安全性は確立されているものとわかっていなかったから。

問五 ―線部②「本当なら世界最先端の技術などという発想自体がおかしいのである」とあるが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 技術は常に更新され続けるもので、いつまでも最新であり続けることはできないから。
- イ 世界で一番すぐれたものが、世界最先端の技術であるとは限らないから。
- ウ 各分野によつて用いられる技術は異なるので、単純に比較をすることはできないから。
- エ 技術における世界最先端とは、それが発見されたときに時代遅れになるから。
- オ 世界にはいまだ発見されていない最先端の技術が確実に存在しているから。

問六 ―線部③「ごく一部のものの『世界最先端』を『日本は世界最先端』と故意に読み替える」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は物心あらゆる面において、世界で一番すぐれているのだと無自覚に強調すること。
- イ 日本だけが、あたかも世界の最先端に追いついた国であるかのようにふるまうこと。
- ウ 日本はサービス産業の世界において最先端を走る、唯一の存在であるという誤解をすること。
- エ 日本が原発事故処理の最前線に立っているかのように、国際社会に対してふれまわること。
- オ 日本は工業製品の最先端技術を有していることで、多くの領域でも世界一優秀だと拡大解釈すること。

問七 ―線部④「生産性の高い工場」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの負債があるが、最新鋭の設備を備えた工場。
- イ 少人数ではあるが、大量の製品を製造する工場。
- ウ 手間がかかるが、たくさんの検査を経た製品を作る工場。
- エ 利益は少ないが、高品質の製品を製造する工場。
- オ 小規模だが、一流の職人が在籍する工場。

問八 ―線部⑤「そしてわれわれは、この世界のなかの群衆だった」とは、どのようなことを言ったものか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア「われわれ」はつくられたイメージを、無批判に肯定してきた存在だったということ。
 イ「われわれ」はイメージによって開発された技術を、過信しすぎていた存在だったということ。
 ウ「われわれ」は空虚なイメージを、ただ押しつけられてきた存在だったということ。
 エ「われわれ」は偽りのイメージにだまされない、賢明さを持った存在だったということ。
 オ「われわれ」はイメージを疑いながらも、必要な設備をつくり続けてきた存在だったということ。

問九 ―線部「三月十一日以前の原発イメージ」とはどういうものか。「放射能」、「安全神話」、「原子力発電所」という言葉を必ず使って、四十五字以上五十字以内で説明しなさい（句読点・符号も一字として数える）。

問十 次の文を読み、本文の内容を述べたものとして正しいものには○、間違っているものには×で答えなさい。

- ア 高度成長期に作られてきたさまざまな物が脅威であることがわかった以上、現代を生きるわれわれはそれらから脱却する生き方を積極的に模索するべきである。
 イ 戦後の混乱から立ち直った日本は、工業製品に加え、農業においても安全性を最優先する方法を考案するに至った。
 ウ 筆者は人々による百円ショップへのニーズを否定はしていないが、その接客方法によって消費者が誇りを失うのではないかと危惧^{きぐ}している。
 エ 私たちが生きる世界のイメージを崩壊させたのは、東日本大震災による地震と津波ではなく、原発事故であった。
 オ 現代人が今後の自分たちを支えるイメージを獲得するためには、これまでのイメージが失われたという現状を正視することが必要である。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

年中夜中の三時に起こされた。風呂の釜を焚くのだ。毎日毎日釜を焚いて、もうかれこれ三十年になる。

十八の時、和歌山から大阪へ出て来て、下寺町の風呂屋へ雇われた。三右衛門という名が呼びにくいというので、いきなり三平と呼ばれ、下足番をやらされた。女客の下駄を男客の下駄棚にいたりして、随分まごついた。悲しいと思った。が、直ぐ馴れて、客のない時の欠伸のしかたなどもいかにも下足番らしく（1）について、やがて二十一になった。

その年の春から、風呂の釜を焚かされることになった。夜中の三時に起こされてびくりにした眼で釜の下を覗いたときは、さすがに随分情けない気持ちになったが、これも直ぐ馴れた。あまり日に当らぬので、顔色が無気力に蒼ざめて、しよつちゅう赤い目をしていたが、鏡を見ても、べつになんの感慨もなかった。そして十年経った。

まる十三年一つ風呂屋に勤めた勘定だが、べつに苦勞し辛抱したわけではない。根気がよいとも自分では思わなかった。へ a くと十三年経ってしまったのだ。

しかし、三平は知らず主人夫婦はよう勤めてくれると感心した。給金は安かったが、（2）を売ることもしなかったのだ。欠伸も目立たなかった。軀も小さかった。けれども、べつに三平を目立って可愛がったわけでもない。

①たとえば、晩業に河豚汁をたべるときなど、まず三平に食べさせて見て中毒らぬとわかってから、ほかの者がたべるといふ風だった。

これにも三平は不平をいわなかった。

「御馳走さんでした」

十八のときと少しもかわらぬ恰好でぺこんと頭を下げ、こそこそと自分の膳をもって立つその様子を見ては、さすがにいいらしく、あれで、もう三十一になるのではないかと、主人夫婦は三平の年に思い当った。

（中略）あるいは女ぎらいかも知れぬが、しかし国元の両親がなくなつたいまは、いわば自分たち夫婦が親代りだ。だから、たとえ口には出さず、素振りにも見せなくても、年頃という点はのみこんでやらねばならぬ。よしんば嫌いなものにせよ、一応は世話してやらねば可哀相だと、笑いながら嫁の話をもち掛けると、

「……………」

ぶつとふくれた顔をした。②案の定だと、それきりになった。

三年経った。

三人いる女中のなかで、造作のいかつい顔といい、へ b した体つきといい、物言い、声音など、まるで男じみて、てんで誰にも相手にされぬ女中がいた。些か斜視のせい、三平を見る眼がどこか違つと、ふと思ったお内儀さんが、

「あの娘三平にどないでっしゃろ。同じ紀州の生れでっさかい」

主人に言う、

「なんぼなんでも……」

三平が可哀相だとは、しかし深くも思わなかったから、三平を呼び寄せて、こんどは叱りつけるような調子で、

「貰つたらどないや」

三平はちよつと赧くなつたが、直ぐもとの無気力に蒼い顔色になり、ぺたりと両手を畳の上について、

「俺の体は旦那はん（うぢはん）に委せてあるんやさけ、旦那はんのいう通りにします。どなえな女子でもわが妻にします」

と、まるで泣き出さんばかりだった。

そして、三平と女中は結婚した。

が、婚礼の夜、三平は夜中の三時に起きた。風呂の釜を焚くのだ。花嫁は朝七時に起きた。下足番をするのだ。

三平は朝が早いので、夜十時に寝た。花嫁は夜なかの一時に寝た。仕舞風呂にはいつて、ちよつと白粉などつけて、女中部屋に

戻って、蒲団を敷いて寝た。三平は隣りにある三助の部屋で三助たちと一緒に寝ていた。三平の遠慮深い軀をききながら、彼女は横になった。直ぐ寝入った。ひどい歯軋りだった。

その音で三平は眼がさめる。もう三時だ。起きて釜を焚くのだ。四時間経つと花嫁は起きて下足番をした。

三平はしよっちゅう裏の釜の前にいた。花嫁はしよっちゅう表の入口にいた。話し合う機会もなかった。

主人は三平に一戸をもたしてやるのかといったが、三平はきかなかった。

「せめてどこぞ近所で二階借りしいな」
断った。

月に二度の公休日にも、三平はひとりで湯舟を洗っていた。花嫁が盛装した着物の裾をからげて、湯殿にはいつて来て、

「活動^{注2}へ行こら、連れもて行こら」

と、すすめたが、

「お主やひとりで行つて来やえ」

そこらじゅうへ c 〽と、たわしでやっていた。

そして十五年経った。夫婦の間に子供も出来なかったが、三平は少し白髪が出来た。五十に近かった。男ざかりも過ぎた。

夫婦の仲はけつして睦まじいといえなかったが、べつに喧嘩もしなかった。三平はもともと口数が少なく、女中もなにか諦めていた。雇人たちが一緒に並んで食事のときも、二人は余り口を利かなかった。女中が三平の茶碗に飯を盛ってやる所作も夫婦めいては見えなかった。ひとびとは二人が夫婦であることを忘れることがあった。

しかし、三平があくまで正直一途の実直者だということは、誰も疑わなかった。

ある日、急に大金のいることがあつて、三平を銀行へ使いに出した。三平のことだから、吩咐^{いひつ}けられて銀行から引き出した千円の金を胴巻のなかにいれ、ときどき上から押えて見ながら、立小便もせずに真直ぐ飛んでかえるだろうと、待っていたが、夕方に

なつても帰つて来なかった。

今直ぐなくては困る金だから、主人も狼狽^{ろうばい}し、かつ困つたが、それよりも三平の身の上が案じられた。

まさか持ち逃げするような男とは思えず、自動車にはねとばされたのではなからうかと、夕刊を見たが、それらしいものも見当らなかった。六ツの子供がダツトサンにはねとばされた記事だけが、眼に止まった。

あるいはどこかの小僧に自転車をつつつけられ、千円の金を巻きつけてある体になんちゅうことをするかと、喧嘩を吹っかけ、拳句は撲つて鼻血を出したため交番へひっぱられた……そんな大人気ないことをしたのはないかと、心当りの交番へさがしにやつたが、むなしかった。

銀行へ電話をすると、宿直の小使いが出て、要領が得られなかったが、たしかに金はひき出したらしかった。それに違いは無さそうだった。

夜になつても帰らなかった。

探しに出ていた女中は、しょんぼり夜ふけて帰つて来た。

「ああ、なんちゅうことをして呉れちゃんなら、えらいことをしてくれたのし。てつきり、うちの人は持ち逃げしたに決つちやるわ。ああ、あの糞^{くそ}たれめが。阿呆^{あほう}んだらめが……」

女中は取乱して泣いた。^③主人は、

「三平は持ち逃げするような男やあらへん。心配しいな」

と、慰め、これは半分自分にいいかせた。

しかし、翌朝になつても三平が帰らないとわかると、主人はもはや三平の持ち逃げを半分信じた。金のこともあったが、しかしあの実直者の三平がそんなことをしでかしたのかと思うのが、一層情けなかった。

人は油断のならぬ者だと、来る客ごとに、番台で愚痴^{ぐち}り、愚痴^{ぐち}った。

昼過ぎになると、やっと三平が帰って来た。そして千円のと、銀行の通帳と実印を主人に渡したので、主人はびっくりした。ひとびとも顔を赧くして、びつくりした。三平の妻は夫婦になつてはじめて、三平の体に取りすがつて泣いた。「なんでこないに遅なつてん？」

と、主人がきくと、三平はいきなり、

「俺に暇下さい」

といったので、主人はじめ皆一層びっくりした。

「なんでそないなことをいうのよう？」

三平の妻は思わず、三平の体から離れた。

三平は眼をばちくちさせながら、こんな意味のことをいった。

——今後もあることだが、どんな正直者でも、われわれのような身分のものに千円のと、銀行の通帳と実印を主人に渡したので、主人はびっくりした。三平の妻は夫婦になつてはじめて、三平の体に取りすがつて泣いた。「なんでこないに遅なつてん？」

自分^④はかれこれ三十年ここで使うてもらつて、いまは五十近い。もう一生ここを動かぬ覚悟であり、葬式もここから出して貰うつもりでいたが、昨日銀行からの帰りに、ふと魔がさしました。

▼つくづく考えてみると、自分らは一生貧乏で、千円というような大金を手にしたことがない。此の末もこんな大金が手にはいるのは覚つかない。この金と、銀行の通帳をもつて今東京かどこかへ逐電したら一生気楽に暮らせるだろう。

そう思うと、ええもうどうでもなれ、永年の女房も置き逃げだと思い、直ぐ梅田の駅へ駆けつけましたが、切符を買いおうとする段になつて、ふと、主人も自分を正直者だと信じて下すつたればこそ、こうやつて大事な使いにも出してくれるのだ。その心にそむいては天罰がおそろしい。女房も悲しむだろうと頭^⑤に来て、どうにも切符が買えず、帰るなら今のうちだと駅を出て、それでも電車に乘らず歩いて一時間も掛^かつて心齋橋まで来ました。

橋の上からぼんやり川を見ていると、とにかくこれだけの金があれば、われわれの身分ではもうほかにのぞむこともないと、また悪い心が出て来ました。

そして梅田の駅へ歩いて引きかえし、切符を買いおうか、買うまいか、思案に暮れて、たたずむ内に夜になりました。

結局、思いまどいながら、待合室で一夜を明かし、朝になりました。が、心は決しかね、梅田のあたりへ d 〳〵しているうちに、お正午のサイレンがきこえました。

腹がにわかに空いて、しょんぼり気がめいり、冥^{みよ}加^かおそろしい気持ちになり、へ e 〳〵帰って来ました……。

「俺のような悪い者には暇下さい」

泣きながら三平がいうと、主人はすっかり感心して、むろん暇を出さなかった。▲

三平の妻は嬉^{うれ}しさの余り、へ f 〳〵と三平のまわりをうろついて、傍を離れなかった。よそ眼にも睦まじく見えたので、はじめて見ることで、ひとびとは興奮した。

が、どちらかというと、三平は鬱々^{うつつ}としてその夜はたのしまず、夜中の三時になると、起きて釜を焚いた。女中は七時に起きて下足の番をした。

少しも以前と変りはなかったから、ひとびとは雀^{さく}百^もまでだといつて、嘆息した。^⑥

ところが、入浴時間が改正されて、午後二時より風呂をわかすことになった。三平は夜中の三時に起きたが、なんにもすることがないので、退屈した。間もなく、朝七時に起きることになった。妻と一緒に起きることになったのだ。従つて寝る時間も同じだった。

朝七時に起きたが、釜を焚くまでかなり時間があつた。妻も下足番をするまでかなり時間があつた。随分退屈した二人は、ときどき話し合うようになった。三平は五十一、妻は四十三であつた。^⑦

いまでは二人はいつ見てもへ g 〳〵と語り合つていた。

開浴の時間が来て、外で待つてゐる客が入口の障子をたたいても、女中はあけなかった。両手ともふさがつてゐるのだ。三平の

白髪を抜いてやっているのだ。客は随分待たされるのだった。

(織田作之助『人情噺』による)

注

- 1 三助：風呂屋で客の体を洗ったり、雑役をしたりする男。
- 2 活動：「活動写真」の略。映画の旧称。
- 3 ダットサン：小型車の一種。
- 4 冥加：「とても」「非常に」の意味。

※今日の人権意識に照らして不適切と思われる表現が含まれていますが、時代的背景と作品の価値、および作者が故人である点を考慮し、そのままとしました。

問一 (1) (2) に入る適当な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

(1) ア 目 イ 床 ウ 鼻 エ 手 オ 板

(2) ア 油 イ 恩 ウ 顔 エ 国 オ こび

問二へ a ヱ へ g ヱ に入る適当な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一回しか使えません。)

ア ひそひそ イ とぼとぼ ウ うろうろ エ ごしごし オ そわそわ カ ごつごつ キ うかうか

問三 〰線部「毎日毎日釜を焚いて、もうかれこれ三十年になる」について、このときの「三右衛門」は何歳と考えられるか。次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 十八歳 イ 三十一歳 ウ 四十二歳 エ 四十三歳 オ 五十一歳

問四 〰線部①「たとえば」以下の一文は何の一例か、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 主人夫婦が従業員の食事にまで心配りをしていたことの一例。
- イ 主人夫婦が三平の胃袋が丈夫なことまで知っていたことの一例。
- ウ 主人夫婦が三平に風呂釜炊きのほかの仕事までさせていた一例。
- エ 主人夫婦が三平をとくべつに目をかけたわけでもないことの一例。
- オ 主人夫婦が三平を生活面でもたいへん頼りにしていたことの一例。

問五 — 線部②「案の定」について、次の(一)、(二)の間に答えなさい。

(一)「案の定」の意味として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア あらかじめ考えていた通り イ 果たして ウ 思いの外 エ 予想通り オ やはり

(二)「案の定」の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 三平は無気力だ。

イ 三平は女ぎらいだ。

ウ 三平には好きな娘がいる。

エ 三平は主人夫婦を信頼していない。

オ 三平は内心結婚したがっている。

問六 — 線部③「主人は、『三平は持ち逃げするような男やあらへん。心配しな』と、慰め、これは半分自分にいいきかせた」について、このときの「主人」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 長い時間帰ってこなかった三平が実直者であることを信じて、彼が帰ってくることを全く疑っていない。

イ 三平の女房の手前、取乱して泣くこともできないので、冷静そうにふるまっている。

ウ 三十年間、実直者であった三平を信じたけれど、彼が帰ってこないので不安な気持ちがもたげている。

エ 正直一途の三平といえども、やはり千円の誘惑には勝てず持ち逃げしてしまったかと半ば絶望している。

オ 三平が持ち逃げをしたことを確信し、人は油断のならぬ者だと、絶望の淵に立たされている。

問七 — 線部④「かれこれ」と同じ意味で使われているものを次から選び、記号で答えなさい。

ア かれこれと考え合わせてみる。

イ かれこれと申し上げる。

ウ かれこれするうちに日が暮れた。

エ かれこれ二〇回目だ。

オ 彼はかれこれやだ。

問八——線部⑤「頭に来て」のここでの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア かつと腹が立つ。
- イ 頭が痛くなる。
- ウ むしゃくしゃする。
- エ 頭髪が白くなる。
- オ 念頭に浮かぶ。

問九——線部⑥「雀百まで」について、省略されている慣用句の下の部分をはらがなで答えなさい。

問十——線部⑦「嘆息した」の理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 三平と女中が「事件」の後、よそを借りると思っていたのに、二人の寝所は以前と変わらなかったから。
- イ 三平と女中が今後仲睦まじく暮らしていくと期待したのに、二人の間柄は以前と同じように夫婦らしく見えなかったから。
- ウ 改心した三平がこれまで以上に仕事に打ち込むと確信していたのに、以前と同じような働きぶりであったから。
- エ 主人が三平をさらに信頼して重く用いてくれると思ったのに、あいかわらず釜焚きの仕事しか与えなかったから。
- オ 大変な騒動を引き起こした三平を女中は許したのに、これまで以上に二人の関係が疎遠になってしまったから。

問十一——▲までの「三平」の気持ちの移り変わりを示したものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 悪心 ↓ 反省 ↓ 迷い ↓ 悪心 ↓ 葛藤 ↓ 改心
- イ 悪心 ↓ 改心 ↓ 迷い ↓ 葛藤 ↓ あきらめ ↓ 開き直り
- ウ 悪心 ↓ 感謝 ↓ 開き直り ↓ 改心 ↓ 悪心 ↓ 反省
- エ 喜び ↓ 信頼 ↓ 恐怖 ↓ 開き直り ↓ 悲嘆 ↓ 反省
- オ 喜び ↓ 反省 ↓ 迷い ↓ 悪心 ↓ 葛藤 ↓ 開き直り
- カ 喜び ↓ 後悔 ↓ 反省 ↓ 悪心 ↓ 動揺 ↓ 改心

